

---

『祈りの民』と題し、大きく2つのことを教えられたい。

①「信仰者のこころえ」②「私たちに与えられている特権」

この箇所には、ソロモン王が完成した神殿の奉献式を行い、その時に、心からの祈りささげ、主を礼拝したことが記されている。ゆえにこの祈りは、ソロモンがイスラエルの王として国家を代表して神殿でささげた公の祈りであった。今日の私達でいえば、教会でささげる公の祈りも同じことと言える。

一方、この祈りは、公の祈りでありながらもそれだけではなく、今から3000年以上も前の一人の信仰者としての祈りでもある。それゆえ、このソロモンの祈りの言葉を見ると、信仰者としての誠実さや主を恐れる思い、また聖さ、そして人間が抱えるあらゆる問題に対する意識と悩み、そして率直さなどを知ることが出来る。

では、このソロモンの祈りから①「信仰者のこころえ」を見ていきたい。

神殿が完成する以前のイスラエルの民は、アブラハムから始まり、ダビデの代までは、荒野をさまよったり、エジプトに400年も寄留したりし、また同族に追われながらも、行く先々で石を積み上げ祭壇を築いたり、また移動式の幕屋で礼拝が行われてきた。信仰の篤いダビデは、これまでイスラエルの民がさまよい歩んできた歴史から、『この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中にとどまっています。Ⅱサム7：2』と、主への感謝と畏怖の思いから、主のために神殿建築をしたいと主に願い出た。そして主はダビデの願いを認め、神殿建築を行うこととなった。しかし実際に神殿を建てるのは、戦いで多くの血を流したダビデではなく、その息子であるソロモンが建てるようにと、主に告げられ、そのためダビデは息子ソロモンが神殿を建てる事が出来るようにと、必要な資材と、また金銀財宝などのたくさんの資金を蓄え、さらに神殿の詳細な設計図をもつくり、また奉仕者の任命と明確な規定をも命じ、そのすべてをソロモンに託したのである。

こうしてソロモンが王になって神殿建設に取り掛かり、完成まで実に20年の歳月をかけてようやく神殿が完成したのである。

今日の箇所のソロモンの祈りはまさに、この時にささげられた祈りである。おそらくイスラエルの民は、この奉献式の時、完成した神殿を見て、これまで長きにわたり流浪の民だった歴史もすべて回想していただろう。そして自分たちが心から安心して主を礼拝できる神殿という特別な場所が与えられたことに、非常な喜びがあったのではないだろうか。（そこで捧げられたいけにえの数からもそのことが分かる。（Ⅱ歴代7:5）

神殿が完成して以来、イスラエルの民は主を礼拝する神殿を中心に一つに集まり、また一致して、共に主に祈りをささげ、そして賛美をささげ、朝毎に夕ごとに全焼のいけにえや様々ないけにえをも捧げ、そして主の教えを聞き、心からの礼拝をささげることができるようになったのである。こうしてイスラエルの民は神殿で主を礼拝することを中心として生活するようになった。

私達でいえば、それはまさしく「教会」である。CPCとMJCCという特別な場所があることに心から感謝したい!!そして私たちも全く同じように、教会で主を礼拝することを中心として生活しているのである。

さて、その感謝と喜びの中で捧げたソロモンの祈りだが、ソロモンはまず13節にあるように、「イスラエル全集団の前でひざまずき、両手を天に差し伸べて」とある。これは、イスラエルの民に対してではなく、主に対してささげた信仰の行為である。その意味は、偉大な神に対して、自らは取るに足らない「しもべ」であるとい

うへりくだりと完全な「服従」を表したのである。それが「ひざまずく」という行為である。また「両手を差し伸べ」たのは、「栄光は神にのみ！」という「賛美」を表すための行為であった。

ソロモンのこの行動は、『口に出して何かを祈る』という、その祈りを捧げる以前の行動である。このことから、ソロモンは一国の王であることを誇るのではなく、『自分とは何者であるか、そして神とはいったいどのような方であるのか！』ということをよくわきまえ知っていたがゆえに行えたことなのである。

ソロモンのこうした信仰は、続く 14 節からの祈りの言葉からさらに良く解る。

14 「イスラエルの神、主。天にも地にも、あなたのような神はほかにありません。あなたは、心を尽くして御前に歩むあなたのしもべたちに対し、契約と愛とを守られる方です。」

ここでソロモンは、「イスラエルの神、主」とは、他に類を見ない、比類なき優位性を持つ絶対なるお方であることを告白している。ゆえにその方の前に出る時に、彼は当たり前のように自らの顔を上げることも、ひざまずいたのである。聖書には、神の姿を見ることは許されず、見た者は死に定められるのである。

今日、世俗の波を受けてか、多くの教会に見られることの中に、神である主に祈る時に、この絶対なるお方に対しての恐れ、畏怖の念を持つよりも、友としての部分だけが取り上げられることが決して少なくない。

確かにイエス様がこの地上に来られ、私たちの友となってくださり、実に十字架にまでかかってくださったその恵みは計り知れないほどの祝福である。けれどもそれだからと言って、父なる神に対して恐れ(畏怖の念)を持たなくなるということではない。ソロモンはそのことをわきまえていたのである。

ゆえに彼は、その祈りのクライマックスで、「いつも彼らがあなたを恐れて、あなたの道に歩むためです」と 31 節で祈ったのである。

「信仰者のこころえ」の中で、この比類なき誠の神に対する恐れが無くなる時に、私たちは神を自分の小間使いとしてとらえていることが決して少なくない。私たちは徹底して、自分とは人間であり有限な存在で、神に造られた存在にすぎないことを、わきまえなければならないのである。その上で、無限に存在され、すべての恵みを惜しみなく与えてくださる比類なき神に向かって祈りを捧げるのである。

ソロモンは、その長い祈りの中で、さらに神について大きく 3 つのことを告白している。

第一は、神とは「約束の神」である。

15-16 節「あなたは、約束されたことを、あなたのしもべ、私の父ダビデのために守られました。それゆえ、あなたは御口をもって語られました。また御手をもって、これを今日のように、成し遂げられました。今、イスラエルの神、主よ。あなたのしもべ、私の父ダビデに約束して、『あなたがわたしの前に歩んだように、あなたの子孫がその道を守り、わたしの律法に歩みさえするなら、あなたには、イスラエルの王座に着く者が、わたしの前から、絶えることはない』と仰せられたことを、ダビデのために守ってください。」

ソロモンは主ご自身が約束の神であることを告白し、ゆえにどうかその約束を与えてくださいと願い、祈ったのである。

第二は、神とは「遍在と臨在の神」である。

遍在とは、どこか一箇所にとどまるのではなく、あらゆるところにゆきわたって存在するということだが、ソロモンはこの比類なき神はまさに、遍在されるお方であると 18 節で告白している。

18 「それにしても、神ははたして人間とともに地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。」

つまり神には縛られるものが一切ないということである。

しかしながらソロモンは、神がそういった遍在のお方であることを知りつつも、あえてイスラエルの神殿という場所で祈られる祈りを聴いてくださいと願ったのである。これこそが臨在してくださる神なのである。

それが 19-20 節の祈りである。

「けれども、あなたのしもべの祈りと願いに御顔を向けてください。私の神、主よ。あなたのしもべが御前にささげる叫びと祈りを聞いてください。そして、この宮、すなわち、あなたが御名をそこに置くと仰せられたこの所に、昼も夜も御目を開いていてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。」

神殿、すなわち教会とは、遍在の神が臨在してくださり、私たちの祈りを聴いてくださる祈り場なのである。

第三は、神とは「さばきと赦しの神」である。

22-39 節までに主に 7 つのことをソロモンは祈っている。①隣人に罪を犯した場合、②敵に打ち負かされた場合、③干ばつの場合、④飢きんや戦争の場合、⑤外国人が祈った場合、⑥遠くで戦う場合、⑦捕虜となってしまった場合の 7 つである。

これらのことはいつの時代の人間にも当てはまることである。それゆえソロモンは、自分たちが人間ゆえに、聖い神の前にあらゆる罪を犯した場合、悔い改めて祈るなら、どうぞその罪を赦してください！と願ったのである。そして 36 節ではこのように告白したのである。「…罪を犯さない人間は一人もいないのですから」

ソロモンはあの 7 つの祈りの中で、結局人間とは、必ず罪を犯すものだと言っている。このこともまた人間というものをへりくだり冷静に捕らえている。そしてこのソロモンの赦しを願う祈りは、いうなれば『人間は必ず罪を犯します。でもどうぞ悔い改めるならば赦してください。』というものである。これは罪と全く関わりを持たない聖い義なる神が、人の祈りを聞き届けてくださるといふ、驚くべき恵みなのである。

こうしてソロモンは、約束と遍在と臨在とさばきと赦しの神にむかって恐れつつ心からの祈りを主に向って、完成した神殿で捧げたのである。

ソロモンの祈りは、こうした信仰が元となり祈りへと導かれているのである。祈りを捧げる上で、私たちが今よりももっと、無限のお方であり比類なきお方である神のことを知らなければなりません。そうでなければ、このソロモンの様な深い祈りをささげることが出来ません。もっともっと主に対して真実な信仰を持たせていただきたいと願われます。これこそが「信仰者のこころえ」なのである。

最後に大きい 2 番目の「私たちに与えられている特権」ということを考えたい。

ソロモンが祈りを捧げて後、主はその祈りへの応答として、ささげたすべてのいけにえに火を持って焼き尽くした。これこそが民の祈りを聴き届けてくださるといふ神からの応答の印であった。すなわち民の祈りに、今も生きておられる神は、必ずそれに対して応えてくださるのである！

さて、この時、祭司たちは宮に入ろうとしたが入れなかった。7:2「祭司たちは主の宮に入ることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。」とある。

確かに神殿では物凄い数のいけにえが捧げられていた。それを焼き尽くすとなれば、当然、煙も物凄く立ち上っていただろう。それゆえに祭司たちは目の前が見えず宮に入ることが出来なかった。と考えることも出来る。しかしそれよりも、火を持って焼き尽くす圧倒的な御力の神の臨在を感じ、恐れて動けなくなったというのが、この時の彼らの心情だろう。7:3にはこのように記されている。

「イスラエル人はみな、火が下り、主の栄光がこの宮の上に現れたのを見て、ひざをかがめて顔を地面の敷石につけ、伏し拝んで、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」と主をほめたたえた。」

「膝をかがめて顔を地面の敷石につけ伏し拝んだ」とはまさしく主への恐れ・畏怖の思いからである。私たちの前に臨在してくださる神は、確かに祈りを聞き届け応答してくださる神でもあるが、すべてのものを焼き尽くすことが出来る聖い神でもある。その圧倒的な御力の前に、私たちはただただ恐れ、畏怖の思いを持ちひれ伏すしかないのである。

けれども！この全く聖く、そして罪に対して焼き尽くす火を持っておられる神は、人が罪を悔い改めるならば、

その捧げものを受け入れ、そして親しく交わってください。という驚くべき恵みが礼拝の中に溢れていた！のである。民はその神の恵みの中に喜び楽しむことが出来たのである。(7:10「…彼らは主がダビデと、ソロモンと、その民イスラエルに下さった恵みを喜び、心楽しく…。」)

そしてこの神の焼き尽くす火の中に飛び込んでくださった方こそが、まさしく御子イエス・キリストであり、十字架なのである。ゆえに私たちは、このイエス様の十字架なしには、全てを焼き尽くす聖い神の前に進み出ていくことが全くできないのである。礼拝は、私たちが御子イエス様を携えて、その十字架の陰に身を置かせていただくことにより、全く聖く、全ての罪をことごとく焼き尽くす神のまえに、罪を見出されずに、義とされて、神との交わりが赦されているという恵みと特権が溢れている場所なのである。

この驚くべき恵みこそが私たちに与えられている特権なのである。十字架の上で私たちの罪のために焼き尽くす炎に身をとおじてくださった御子イエスの限らない私たちへの愛が、全く聖い神との交わりを可能としてくださったのである。この世的に人間的で魅力的なイベントがあるとか、教会員になると特別な特典が受けられるということは必要ないのである。

イスラエルの民は神殿という祈り場が与えられ、そしてソロモンの祈りと共に一つとなった。私たちも、一つの群れとして、同じ神を見上げ、心を一つにし、一致して、一つの限られたこの宮である教会(会堂)で共に比類なき神、約束の神、遍在と臨在の神、さばきと赦しの神に心からの祈りを捧げ、そして御子イエスの十字架の贖いにより、焼き尽くす火を持った聖い神との恵の交わりが与えられている特権を心から感謝したい。

この祈りと礼拝の中には、どこにも人間同士の戦いなどはありません！全ての者がただただ神を見上げるのみです!!

ソロモンが完成させた神殿では、こうした祈りが最初に捧げられ、以来ここからイスラエルの民は「祈りの民」としての歩みが始まったのである。私たちも「祈りの民」とならせたい。

アーメン。